

共感の力

社会変えていくための源泉



経済学者アダム・スミスは「経済人」という概念を用いて人々の経済行動を合理的に説明しようとした。経済的利益に関心を払い、自らの利益を最大化しようとすることに専念すれば、市場の働きを通して社会的に見ても「最大多数の最大幸福」が実現できると考えていた。この「市場の働き」が「神の見えざる手」と表現され、市場原理に基づく現代経済学の根幹を支えている。



英グラスゴー大学の図書館所蔵の『国富論』の初版本（手前）などアダム・スミスの著作

しかし、専門家によれば、「神の見えざる手」という表現は、「国富論」と「道徳情操論」の二つに、それぞれ1回ずつ現れるだけだという。スミスは経済学の後継者と自称する人たちが強調するほどには「神の手」に頼っていたわけではない。

スミスの基本的な考え方を理解するためには、「道徳情操論」で強調される「同感」「共感」と訳される sympathy という概念に戻る必要がある。スミスは「経済人」の行動の基礎には、「共感」があり、利他的な思いが経済人の過剰な自己利益追求を抑制すると考えていた。

近代社会の経済的な取引は、取引の当事者が対等であるこ

とを大前提とする。その対等性は、たとえば生産者と消費者とが対等な権利を保障され、相手の権利を侵害しない限り、利益を追求することができるというものである。

それだけであれば、共感の働きは必要ない。生産者も消費者も自分が納得できる価格で取引が成立すればよいだけだからである。その時、それぞれの取引当事者の心は内に向けていて相手に向いてはいない。それでは人と人とのつながりを生むことのない、その場限りの合意にすぎない。

共感とは、それぞれの相手の立場や大事にしていること、それらを全体として受け止め、認め合うことを前提とする。生産者と消費者の例に戻れば、その生産者がものづくりで何を大事にしているかを理解すること、そのような生産の在り方の持続が社会的に有意義であることを認めることが消

費者には求められる。一方、生産者には消費者が購入するものやサービスの何を評価ポイントにして購入の判断をするかなどさまざまな状況を理解し、その立場を尊重しながら、価格や購入量が決まってくるということが重要な意味を持つ。それは値段交渉の妥協ではなく、相互理解なのである。

そうした取引の背後にある当事者間の「人間同士の交流」が共感の基盤になる。消費とか生産の機能的役割に直結する利害を超えた双方方向の理解が人と人のつながりを強め、社会を変えていく力の源泉になる。

肌の色や出自で権利を制限するような、どこかの国の大統領の言動は論外だが、誰もがそれぞれを人間として丸ごと受け止め、違いを理解し合いながら、受け入れ合うことの大切さを忘れないでいたい。（東京大名誉教授 武田 晴人）